動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合

〒280 千葉市要町2番8号（動力車会館）

電話｜（鉄電）千葉 2935・2936番
（公）千葉（22）7207番

1990.1.1

No. 3140

新年の決意

勝利の旗をおしたてて 新たな時代に突入

新たな時代の幕あけをかざる新年の空には、ＪＲ体制に総反撃を開始した動労千葉の闘いの旗がへんぽんとひるがえっている。

新生国鉄千葉動力車労働組合として歩みをはじめて以来十年余、われわれの歩んできた道のりは、われわれが自前の力で創りあげた闘いが、みごとに八〇年代に通用したことを示している。

われわれは、動労「本部」との分離独立戦争のなかで、労農連帯をかけて闘った八一・三ジェット闘争のなかで、そして、国鉄分割・民営化―十万人首切り攻撃との激闘のなかで、常に自らの力を信じ、闘いの渦中に身をおいて、労働者としていかに生きるべきか、ほんとうの労働組合とは何かを追求し、多くの血を流しながらも、何物にもかえがたい勝利への道すじを学びとることができた。幾多の試練がわれわれの戦列を鍛えあげたのである。

そして、われわれは、昨年十二月、国鉄労働運動の解体―スト撲滅を狙ったＪＲとＪＲ総連・革マルによる息のつまるような職場支配をつき破って、ＪＲ発足後はじめて、列車をストップさせる本格的ストライキにたちあがった。われわれは、この闘いによって八〇年代の勝利を不動のものとし、実際、新たな決意を胸に、激動する九〇年代の幕あけ、一九九〇年を迎えたのである。

闘争日

国鉄千葉動力車労働組合執行委員会

針路を見失った者は誰か

決断をするたびに、「無謀だ」「自滅の道だ」という言葉がさんざん浴びせられた。しかし、誰が自滅の道を歩み、誰が勝利への道を歩んでいたのか、誰が未来を失い、誰が未来をつかもうとしているのか、すでにここには、激しい歴史のうねりにのみこまれ、針路を見失った者と、最後まで勝利の確信を失わなかった者とが、鮮明な対比をなして浮かびあがっている。

しかし、労働運動の時代を謳歌した者の結末がいかにみじめなものであり、その結果として「完成」された「全的統一」がいかに破綻を内に秘めたものであろうと、これは、歴史の重大な転換点であり、一方、実に四十年間、日本の労働運動をまがりなりにも「牽引」してきた総評は、九〇年代を前に自壊し、われわれの目の前にあるのは、支配階級の手によってつくられた、労働組合とは似て非なる「連合」の無惨な姿のみである。

この十年間、われわれが闘いの全面的な変革の始まりであることに違いはない。

地をはうような労働者の現実がなくならない限り、われわれ自信が、われわれ自身の力と責任によって闘う労働運動をつくりあげなければならないのである。

労働者こそが 変革の担い手に

昨年、天安門広場を埋め尽す労働者学生の叫びと中国政府による流血の惨事にはじまった嵐のような変革のうねりは、東欧諸国に飛び火し、十一月にはベルリンの壁がうち破かれ、ついにチャウシュスク政権が打倒された。

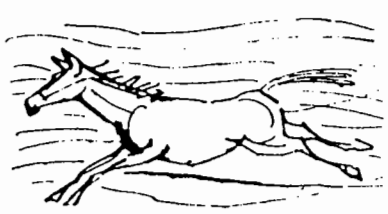
一方、「ブラックマンデー」は、資本主義が末期的な危機にあることを衝撃的につきだし、その呪縛は、アメリカ帝国主義のパナマへの侵略戦争となって凶暴な刃がむき出されている。

帝国主義とスターリン主義による戦後世界体制が完全に行きづまり、地殻変動を開始している。九〇年代、開始された歴史的激動は、世界の支配者共の思惑をこえて、創造もつかないような世界史的変革に向けて発展せざるを得ないことは明らかである。

労働者こそが、この変革の担い手として登場しなければならない。九〇年代、労働者が歴史の創造主として、高々とその旗を掲げる時代が到来したのである。

勝利の九〇年代を 進撃しよう

われわれは、ただちに、清算事業団をめぐる激動に突入する。われわれにとっては、分割・民営化反対闘争は何ひとつ終っていないのだ。われわれは、この五年間の屈辱と苦しみを絶対に忘れはしない。労働者に奴隷のごとき屈辱を強制し続ける元凶共ら、ＪＲ当局とＪＲ総連革マル体制を打倒し、十二名の仲間達を奪い返すために、組合員・家族が一丸となり、全国の仲間と固いスクラムを組んで、勝利の九〇年代を進撃しよう。

一九九〇年一月一日

執行委員長 中野 洋
執行副委員長 布施 宇一
書記長 田中 康宏
執行委員 山田 雄一 等
同 内山 誠
同 滝口 敏雄
同 山口 正美
同 水野 行二
同 白井 敏秀
同 川崎 宣男
同 赤羽根 章
同 外 義
同 清水 博
同 佐藤 匠
同 国分 晴
同 杉本 重則
特別執行委員（青年部長）顧問 中江 昌夫